

我妻俊樹、平岡直子著

『起きられない朝のための短歌入門』

(書肆侃侃房)

帯には「ストレンジャーの(よそ者)のための短歌入門書」とある。ははあ、入門書ね、と読み始めるとのけぞってしまふ。これまでのように歌壇の重鎮が手ほどきする本ではなく、今まさに多くの読者を得ている二人の歌人が短歌を読む／作ることにについて真剣に楽しく話す。短歌のこういうことになっているという部分をことごとくそのままにしない。自分の言葉でどんどん更新していく。

本書は三部構成で「つくる」、「よむ」、「ふたたび、つくる」となっている。実作と批評、作中主体とは？、スランプのりこえ方など普段そのままにしてしまっているテーマについても短歌作品を挙げながら語る。わたしがもつとも興味深く読んだのが、第二部の「よむ」。短歌を作るようになって戸惑ったのが、批評する、歌集評を書く機会がたくさんあることだった。「実作つてちよっとバカになつて作らなきゃいけない部分があつて、でも評が良すぎる人は一瞬もバカにならないんだと思う」(平岡)

コラムとしての一首評、巻末の著者作品二十首もよい。

セーターはきみにふくらまされながらきみより早く老いてゆくのだ 平岡直子

秋が済んだら押すボタン ポケットの中で押しっぱなしの静かな神社 我妻俊樹

入門に留まらない極めてスリリングな一冊だ。(斎藤美衣)

北山あさひ歌集

『ヒューマン・ライツ』

(左右社)

一冊を通して、喜怒哀楽でいうところの怒哀が多く詠まれている歌集だと感じた。

すぽーつのちから ぐいぐいぎるうどん啜つて生きてこれは何メダル

「すぽーつのちから」は主体にまったく響いていない。それどころか、そんなもので社会は何も改善しないという現実への苛立ちがざるうどんを啜るたびに増幅している。

なんでわたしなんでヒューマン真夜中をひたむきに行くフェリーの灯り 羨ましいならなれよ女に、犬に ぐらりと地下鉄がやってくる

「なんでわたしなんでヒューマン」の自問は答えの見当たらないまま続いてしまふ。無責任で想像力のない発言に対するものだと思われる「羨ましいならなれよ女に、犬に」という上句は、主体の視界が「ぐらりと」揺らぐほどの強い感情を乗せて読者に届けられる。

ロボットもニュースも男がつくるものビルは勃ちわたしは製水器

「建ち」ではなく「勃ち」に込められた感情は怒りというより、呆れに近い感情だろうか。「は勃ち」「わたしの韻が〜」というような評をする奴も同罪だぞ、と言わんばかりの迫力がこの一首にはある。(松下誠一)